二分割幽霊綺譚

新井素子

三分割幽霊綺譚

講談社

新井素子

二分割幽霊綺譚
昭和五十八年三月十五日第一刷発行
昭和六十年三月二十日第九刷発行

著者　新井素子
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二一
〒一一二　振替東京八一三九二〇
電話　東京(03)九四五一一二一(大代表)
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂
定価　八八〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担でお取り替えいたします。

© Motoko Arai 1983 Printed in Japan

ISBN 4-06-200224-8 (0) (文二)

目次

Opening いつにもまして暗い朝 5
PART I 想い出すのもたまらん話 16
PART II うっかり死ぬのはあんまりだ 64
PART III 分割された幽霊 94
PART IV そして大地のあちら側 139
PART V もぐら大戦争 190
PART VI 遺伝子の輪をくぐり抜け 230
PART VII 何とかやっとこおこした火事 267
Ending 少しばかりは明るい明日 304
あとがき 312

裝丁・小島　武

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

二分割幽霊綺譚

Opening　いつにもまして暗い朝

深い、喪失感を味わっていた。

砂漠のどまん中に、俺はいた。一面続く、うすい、かわいた茶色。茶色の砂は、見事にかわききっていて、さらさらと、風にのり、流れる。流砂。描かれる模様。巨大な円盤状の太陽。

呼吸が荒い。毛穴という毛穴から、まだ汗になる前の水分が、半ば暴力的に奪いとられてゆく。いきおい口をあけてあえげば——風に乗り、口の中にはいりこんでくる砂。歯をくいしばると、奥歯にこびりついた砂が、ぎりっという、耐えがたい音を発する。

俺は、一人だった。見渡す限り続く、水気のまるでない茶色の大海原の中で、たった、一人。

水をくれ。水が欲しい。

誰にともなく、こう呟く。呟く為に口をあければ、口の中にわずかにあった唾液すら、無残に蒸発してしまう。

喉が渇いていた。頭が痛かった。くらくらした。水が欲しい。

水が欲しい。水をくれ。水はないか。水。

その欲求が心の中で極限にまで高まったその時、それは、おこった。

腕が——俺の右腕が、つけ根から急に消失したのだ。切断されたのではない、最初から右腕なんてものは存在しなかったかのように、血の一滴も流さず、痛みもなく、きれいさっぱりと。

そして。右腕の消失と同時に。目前、五メートルくらいの処に女があらわれた。

うすい更紗をまとった女。砂漠の——姫。彼女はまっ青なガラスの壺を持っており、その中からは、かすかに水のにおいがした。

水を持った女。この、人影のまるでない砂漠に、突然現われた女。その女を見ただけで、俺は心がなごんでゆくのを感じていた。右腕なんか、どうでもいい。俺にその水をくれ。

ところが。いくらあがいても、何故か俺はその場を動くことができなかった。ほんの数メートル先。そこには、水を持った女がいるというのに。

あの女に近づきたい。水が欲しい。

強く、そう念じる。と、今度は左腕がつけ根から消失した。そして、それに呼応するかの如く、体を動かしもしなかったのに、女、先程よりは俺に近づいていた。あと、三メートル。

その後は、それの繰り返し。右足がなくなる。女は、あと二メートルくらいの処。左足がなくなる。女はあと一メートル。胴がなくなる。女、すぐそこ……。

けれど。腕も足もない俺は、女から壺をうけとることができなかった。女は、俺に水を飲ませて

くれようとしたのだが、胴のない俺の口にいくら水を注ぎこんでも、それは首からすぐ下へ落ち——あつい砂へと、しみこんでゆくだけ。

水を飲む為の胴が欲しい。壺をうけとる為の手が欲しい。

そう思ったとたん。俺はもとの五体満足な姿にもどり——砂漠の姫は、消えてしまった。ただ、あたりに水のにおいを残して……。

そして、深い、喪失感。

「砂姫」

俺は、かすかにこう呟いたと思う。砂漠の姫——砂姫。

とたんに、頭にひどいショックをうけ、目が醒めた。

☆

頭が、がんがんしていた。一瞬、本当に目から星が出た。うー、ベッドの脚。ベッドから転がり落ちるのはまだしも、転がり落ちてベッドの脚に思いっきり頭をぶつける、というのは、あまりといえばあまりの寝相ではなかろうか。

時計の針は、五時をさしていた。午前五時、か。とても俺の起きる時間じゃない。もう一回寝なおすか——と思いかけ、やめる。この頭。そして、喉。

やたらと喉が渇いていた。このせいであんな夢みたのかな。何か、ひりひりする程、渇いている。

酒はほどほどにしよう。こんなになるまで、飲むもんじゃない。二日酔いの朝、毎度おなじみの反省をして——と、思い出してしまう。こんなに酒飲んだ原因を。

砂姫。みんなあいつのせいだ。何だってまた、あんな女、ひろっちまったんだろう。重たい後悔。

頭をさすりながら、ベッド直す。とにかく目は醒めちまったんだし、この頭痛じゃ寝なおす気にもなれんし、やんなきゃいけない課題もあった筈だし、とすると論理的結論としては、起きるべきなんだろうな。判ってます、起きるよ。

頭を軽く二、三度振って、何とか人心地つくと——あ、駄目だ。また暗い気分になってきた。暗い気分——大体、部屋自体がそもそも暗いんだから。

晩夏——いや、初秋っていうべきなのかな、この時期の日の出って、まだか。電気つけなきゃ、椅子か何かに激突しそうな程、暗い。

マンションの二階。南向きの大きな窓のある部屋。面倒だから、夜、雨戸閉めずにカーテンひいただけで寝るだろ。と、平生だと、起きた時、やたら明るいんだよな。その明るさに慣れちまってるから、久方ぶりのこの暗い朝は……くらーい気分になるのに充分。

一応、着替えなぞしてから、カーテンあける。どういう訳か、俺、女の子だったりするから、やっぱ、下着姿でカーテンあける訳にはいかんでしょうが。と。

と。

うわあお。何だこれ!?

目の下、全部、土だった。つち!

そりゃ、普通——道路か何かに面してるんでなければ——窓の外、目の下は土だろうって? そうだよ、確かに。いつだって、窓から下を見れば土があったよ。そういう情景だったら、俺もそんなに驚きゃしないよ。

問題は、土の位置なのだ。俺の部屋、二階。故に、土は三メートルくらい下——にあれば、こんなに驚きゃしない。ほんの一メートルたらず下、つまり夜中に地面が二メートル程も持ちあがって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きちまったから、驚いたんだ。

何だ何だ何だ、夜中に地震でもあって、このマンション、二メートルばっか、もぐっちまったのか？

一回、そう思いかけて、すぐそうではないことに気づいた。地面がもりあがったんじゃない、地面の上に、誰かが土の山、作ったんだ。

気をつけて見れば、土がもりあがっている——土の山ができているのは、俺の部屋の前のあたりだけ。高さ二メートル、はば四メートルくらいの土の山。

可哀想に、こんなもんができちまったら、俺のま下の部屋の住人、完全に日照権、奪われちまうぜ——俺のま下の部屋の住人。

東(あずま)くらこだ。東くらこ——俺のま下の部屋に住んでる女の名前。東くらこ——そうだ、あいつだ。

まるで意味もなく、確信する。この土の山は、絶対東くらこが作ったもんだ。そうに決まってる。いくらこのマンションが妙なところとはいえ、このマンションの住人の中で、多少なりとも土に関係あるのは東くらこだけだし、いくらこのマンションが妙なところとはいえ、土の山が自然発生するとは思えん。

このマンションは、妙なところ。こう書いた以上、やはり、このマンションについて多少なりとも書くのが義務ってもんだろうか。

ここ——第13あかねマンションは、13、という数がいけなかったんだろうか、一種、現代のお化け屋敷みたいなマンションだ。

砂姫（あとで書くけど、同居人）に言わせれば、ここ、いろいろなパラレル・ワールドの接点になってて、空間がゆがんでいるのだそうだが——この解釈は、ちっと、どうかと思う。この大東京

のまん中、飯田橋に、何が悲しくてそんなSF的なマンションが建つんだよ。俺は、もっとずっと素直に、ヘルハウスみたいな呪われたマンションだと思ってる。

具体例をあげると、まず、何故かよく人が消える。ある日唐突にいなくなっちまう訳。で、一週間とか一ヵ月とかして、また唐突に現われるんだが（あ、中には、消えたっきり二度と再び帰ってこない人もいる）、殆どの人は、消えていた間のことを一言もしゃべらず、すぐひっこしていってしまうから——余程、異常な体験をしたのだろうと思う。

また、時々、ドアの内側とか窓の外とかが、通常見慣れた普通の場所ではなくなる——唐突に、ドアの中が大海原になっちまったり、砂丘になっちまったりすることがある。一度なんか俺、自分の部屋にはいってドア閉めたら突然、何故か新宿駅西口に出ちまったんだぜ。仕方ないからもう一回電車に乗って家へ帰ったが——これも、普通では、ないと思う。

その他、やれ誰もいない筈の部屋から女のすすり泣きが聞こえただの、夜、廊下を黒い影が横切るの、その手のうわさにはまるで不自由しないマンションなのだ。何でTV局が取材に来ないのか、不思議なくらい。

で、まあ、普通の感受性を持ちあわせた人間は、こんなとこに、一ヵ月、いつけやしない。おかげで家賃は信じられない程安く（大家も、たたりが怖くてここつぶせないらしい）、故にまだ大学生だっていうのに、俺、十二畳ワンルーム、バストイレつきの部屋に住める訳。

あん？　そんなとこによく住めるって？　いいんだ、俺は。むしろ、こういう処の方が住みやすい。命なんて、いつなくしてもいいと思ってるし——あんまり、人間とつきあいたくないしな。定住者のほとんどいない呪われたマンション。はっ、潜在的自殺志願者にとって、これ以上住みやすいところが、他にあるかよ。

☆

話の進行上、ここらで自己紹介なんてのを、しておくべきなのかも知れない。

俺、斎藤礼子という――今は。今、二十一の女。あん？　女で一人称代名詞が俺なのは気持ち悪いって？　ま、そうだろうな。俺だって知りあいにそんな女がいたら、気色悪いと思うよ。だから俺、一応人前では、あたしとか言ってんだぜ。うー、何たるサービス精神。あたしって一言いうたびに、果てしなく自分がおかまになった気がして……。

あ、今の文、注意して読んでくれた？　今は、斎藤礼子って言うって書いたろ。昔は、斎藤礼朗っつったの。十三の時まで。昔は俺、男だったのだ。

とにかく俺、中二のなかばまで、自分のことをかたく男と信じて育ってきた。親だって何だって、みんな俺のこと男だって思ってた。（というより、俺、その頃までは、少なくとも外見的には完全に男だったのだ）

あの頃は楽しかったな。俺はちょっとしたガキ大将で――中二で背が一七〇あったし（今は一七五、ある）、剣道初段だった（今は四段）。剣道部の主将で、全国大会で一回優勝してる。わりと男前でもあった。彼女だって、ちゃんといたんだぜ。一つ下の、真弓美絵子っつうの。軽い天然パーマで、目がくりっとしてて、ちっこくて可愛い女の子だった。キスまでの仲。

で。こんな環境で、ある日突然、女になってしまったのだ。

仮性半陰陽っつうんだって。遺伝子的にはもともと女だったんだけど、外見――っていうか、性器が男性のような格好してた訳。それが、とあることがきっかけで、判ってしまったのだ。何か、ごくまれにある病気らしい。

まあ、そのあとはえらい騒ぎだった。長男だと思ってた子が実は次女だったんだから……おふくろは泣くし、親父は酒ばっか飲むし、姉貴は何とも言いようのない暗い顔するし、医者は手術すすめるし、カウンセラーはぐだぐだ言うし。俺は完全にノイローゼの一歩手前までいっちまった。しまいには、五体満足のくせに、「君の気持ちは判るけど」なんてほざいたカウンセラー、はったおしてやりたくなった。

とにかく、カウンセラーと何だかんだ〝お話しあい〟なんぞをした結果、最終的に、俺は、女になることになった。遺伝子的に、じゃなくて、外見的にも。手術だぜ手術——思い出したくもないっ！

で、転校、一人でひっこし。

「ねえ、斎藤さんとこのお坊ちゃん、実は女だったんですって」

なんて言われるのには耐えられそうになかったし——大体、学校行って、どうしろっつうんじゃ。

「えー、斎藤です。今日から女になりました」

って言えっつうのか⁉

美絵子に別れも言えなかった。

「ごめん、美絵子。実は俺……女だったんだ」

……言えるかよ！　そんなこと！

で、とにかく隣の区へひっこし（おふくろはついて来るっつって泣いたけど、俺、断った。何よりも、台所でこっそり泣くおふくろ、見ているのが耐えられなかった）、中学校かわり——斎藤礼子としての人生が始まった。

女子中学生。そして、女子高生。そんなもんやって——しみじみ、思った。男っつうのは、何て可哀想な生物だろうと。

だって、女！　あれ、何だよ！

一応、それまでは俺、健全な男子中学生やってたんだぜ。週刊誌のヌードグラビア見ちゃどきどきし、下級生が二月十四日に「先輩……あの、これ」とか言ってチョコレートおしつけて走ってきゃかわいいと思った。

けど。いざ、自分で女やってみれば。

これ程、あつかましく、猫っかぶりで、おっとろしい生き物って、他にいないぜ。男の方が余程純情可憐。

「えー、田村くん？　何よお、真澄、あんなのがいい訳？　あの、ひょっとこみたいな顔のがあ？」

「ちょっと、ひょっとこはひどいよ。彼、あれで結構かあいいんだから」

「かあいい？　あれがあ？　石川くんの方がまだかあいいわよ」

あんなの、だと！　かあいい、だと！　これが、女が男に対して言う台詞かよ。大体、女の子が、女の子って生き物が、男の品定めするだなんて、ありかよ。

それに。何だって女は、この手の話、好きなんだろうな。この手の——誰と誰がつきあってて、どの辺までいってて（AだのBだのCだの）だなんて話。それも、素面で。俺さ。本当、可哀想で見てらんなかったぜ、うわさの種になる男を。

女の子の方は、ついうかれて言っちまうんだろうよ。「あのね……あのね、内緒よ。あたし、ついにやっちゃったの。……うん。キス。……この間、二日にね、ほら、金子くんとね、スケート行ったでしょ。で、金子くん送ってくれて……で……」よもや金子は知らんだろうなあ。金子と由佳がキスしたっての、三日後には由佳の友人大多数が知ってるなんて、おぞましいこと。それも——運

が悪けりゃ、金子のその時の台詞から、キスの角度まで、全部しっかりばれてんだぜ。

そりゃ、俺だって——男だってさ、時々、「森井、あいつ、すげえ胸あんのな」、「北原の方がいいぜ。森井とは顔が違う、顔が」なんてやってた事実は、否定しない。けど、何で女がそんなことやるんだよ！

それに。生理のこと、まさか、女体の神秘とまでは思ってなくても、一応、たいへんなんだろうな、出血するってことは相当痛いんだろうか、なんて思ってた俺——耐えらんなかった、この会話。「ね、斎藤さん、あれ持ってる、あれ……ナプキン。タンポンでもいいんだけどさ」女だろおまえは！　んなもん、人に借りずに自分で用意しとけ！「水泳見学すんの？　かぜ？　……何だ、あれかあ。タンポン使えば？　……はいんないの？」はいんないの、とは何だ、はいんないの、とは！　まして。生理中の女の子に対して、「うー、よるな、うつる」って台詞、あれは一体何なんだ！　生理っつうのは伝染病かよ！

……とにかく、俺、中三の時点で、完全に女に対して幻滅した。幻滅——本当言うと、もう、近よりたくもない。大和撫子は、つつしみとか品位とかって言葉を、一体どこへおっことしてきちまったんだよ。

そして。今更、男に対して夢は抱けず——また、男と友達づきあいもできず。（俺、眼鏡はかけてるけど——もともとハンサムだったろ、自分で言うのも何だが、すげえ美人になっちまったんだ。姉貴が、ミス東京都だもんな。で、俺、姉貴よか……顔、整ってんだよ。胸がないからミス何とかにはなれないけど、それにしても、中学、高校と、ほとんどクラス一の美女だったんだ。で、俺と親しくなった男は……例外なしに、友情以外のもんを俺に期待しちまうのだ。んな気持ちの悪いこと、できるか）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com